昭和38年1月25日発行・第10号

日赤新労ニュース

発行所
日本赤十字新労働組合連合会
（略称「日赤新労」）
東京都港区芝愛宕町2の9
電話・東京501－7080
発行責任者
小崎寿美男

綱領

1. われわれは、社会正義に立脚した良識ある労働運動を通じて、われわれの権利を守り、生活の安定と向上をはかる。
2. われわれは、常に暴力と独裁を排し、自由にして明朗なる民主的労働組合としての健全なる発展を期する。
3. われわれは、赤十字の民主化と近代化を促進することによって、その人道的任務の達成に寄与する。

本年頭初 執行委員会 一月十日・蒲郡で

去る一月十日、村岸会計のあっせんによる愛知県蒲郡市の電々公社保養所において本年頭初の執行委員会を開催し、第五回中央委員会、第二回定期大会の会場、期日その他、懸案の議題を討議した結果、大要次の如く決定をみた。

一、第五回中央委員会の会場、期日について

二月二十四日（日）二十五日（月）の両日、足利市において開催し、会場、宿泊に関しては足利日赤従組のあっせんを求める。

二、第二回定期大会の会場、期日について

四月二十一日（日）二十二日（月）の両日、浜松市において開催し、会場、宿泊に関しては、当執行委員会に列席の熊岡会計監査にあっせんを求め快諾を得た。

三、給与専門部会の開催について

二月十六日（土）十七日（日）十八日（月）の三日間東京において開催と決定。

四、給与改定、年度末手当の獲得について

直ちに解決を迫り、早期獲得を目指して執拗なる団交を継続するよう再確認。

五、その他、アンケート問題、医療費問題、日赤機構問題に論及

以上、慎重な討議を加えてそれぞれの結論を得たが、その後浜松日赤職組、足利日赤従組より好意ある回答に接して、大会会場、中央委員会会場を確保することができた。紙上を借りて謝意を表すると共に、代議員、中央委員各位にあっては出席に万遺憾なきよう準備されることを願っておく。

年末手当の交渉中次から次へと出されるビラ一枚にしても必ず目を通して決して捨て去らなかつたし、寒風吹きすさぶ夜間外に立ち尽してのビラ配りする執行委員、食事も忘れて連絡、意見聴取にとび廻る代議員、要求提出から妥結までの一カ月有余、経営者側で果れるほどの団交を重ねた。斗争日誌を整理しながらよくも連日執行委員会、代議員会を開いたものだと感慨なきを得なかつた。

しかし、職組が生れて〝私は二歳〟というところだから先輩諸組合ほどの経験も実力もないと思うが、目下第一の目標は、単独組合の悲哀を返上して上部団体加入を実現したいことである。日赤新労に加盟して先輩諸組合と手を結び指導して貰いたいことを念願して組合費の値上げ、規約の改正に迫られている。

職組はあくまでも正当な組合運動を堂々と推進する。仲びんがための縮みも甘受することもあろうが、歩一歩と着実な前進を続けたいと思つているわけである。

終りに当職組に対する日赤新労のご厚誼、ご鞭撻を深謝してやまないところである。

長崎原爆病院職組の生い立ちと望み

長崎と言えば九州の西の果、原爆被災もさることながら歴史の上からも名だたるところである。

この都市に原爆被爆者の診療管理のために、昭和三十三年五月に建設されたのが長崎原爆病院、そして開院三年後に結成されたのが長崎原爆病院職組だ。

結成当時一六七名の組合員数は現在二一二名となり期末手当、ベースアップとがつちりと斗争を組み精力的な運動を展開してきた。

旧臘年末手当の交渉では本社通達の枠を突破二十四・五割獲得の成果をあげ全組合員の意気ますます軒昂と云つたところである。

この職組の誇りとすることは、規約で定めた経営者以外はオープンショップであるに拘らず只一人の組合非加入者が居ないという事実である。文字どおり一糸乱れぬ団結と云えるのだ。

この職組の誇りとすることは、規約で定めた経営者以外はオープンショップであるに拘らず只一人の組合非加入者が居ないという事実である。文字どおり一糸乱れぬ団結と云えるのだ。

苦難の歩み

――長浜日赤職組――

われわれが職員組合を結成したのは昨三十七年二月、全日赤労組を離脱して一年目であつた。

三十六年三月、全日赤労組は一部指導者によつて思想の自由、言論の自由が抑圧されていた。

要求貫徹のため、意識昂揚のためという言辞のもとに反対意見は封殺される状態であつた。これは民主的労働組合の在り方ではないと感じた。われわれは労組を離れて有志会を結成、三十六年五月発足した日赤職員統一協議会に参加したのである。

職員組合結成に至るまでの一年間は中傷、誹謗の中に立たされた苦しい期間であつたが、度重なる討議を経て、前記三十七年二月職組結成へ踏み切つた。そして同年六月には全労滋賀地方会議に加入して横の連絡も強化した。

われわれの組合は一応は委員長や書記長等役員を選出したが、その人たちに過重の負担をかけないよう全員が能う限りの協力をすることを申し合わせた。

われわれの組合には秘密がない秘密のないこと、それは直ちに固定な団結につながるのだ。

組合の構成員は医師、薬剤師の全員、それに看護婦、事務職員と各部門にわたつている。

旧労との間には特別の摩擦も起つていない。われわれが組織拡大に焦慮しなかつたこともその原因の一つであつたろうと思われる。

しかし、一つの職場に二つの組合があるという事実は決して喜ぶべきことではない。われわれは敢えて旧労と対立するつもりはないが、彼等が一部分子によつて非民主的行動に走る場合、われわれは彼等と一線を画するのである。しかし、彼等にかかる行動をとらせた責任の一端は明らかに経営者にある。われわれは強く反省を促してやまない。

地元長浜の労働組合が主催した運動会には新・旧組合が合体して参加した。費用の交渉にもともに当り、競技にも仲よく参加してなごやかな一日を楽しんだ。

自己を正視して信じる道を進むには勇気がなければならない。われわれの前途は多事多難であろう。しかし、われわれは勇気をもつてあらゆる障害を乗り越えて前進する覚悟である。

最後に、われわれを支援し、鞭撻してくれた各位に深謝するとともに、新労の発展を願つてやまない次第である。

山田日赤新労組 幹部の横顔

昔からお伊勢まいりで知られた伊勢、その伊勢市外ののどかな田園に位置し、創立六十周年を迎えた山田赤十字病院である。

ここに新生労働組合が生まれたのは去る三十六年三月であつた。当時全日赤はストの真最中。全日赤の非民主的な運動方針と経営者の無能とに憤懣やるかたなかつた医師と、当時非組合員であつた医療技術者と看護婦、全日赤の在り方を批判して脱退した看護婦等が新生労組の構成員であつた。

初代執行委員長小崎寿美男氏を新労連合会の執行委員長として専従に送り出した後をうけ、二代目が現委員長富沢康氏である。

山田日赤新生労組は、この富沢執行委員長の下にがつちりと団結を固め、所期の目的に向つて堂々の前進を続けている。

以下執行部諸氏の横顔を画いてみることとする。

○執行委員長・富沢康（内科医局員）初年度教宣部長として活躍。スポーツ万能。小崎前委員長を兄貴と呼ぶ仲。しかし、麻雀にかけては兄貴以上の技倆と自負する。

○副執行委員長・林節子（小児科勤務看護婦）組合でこの職は事務兼書記兼小使である。その職を一人こつこつとやつているところは傍でみていて頭がさがる。

○書記長・三浦倉吉（検査科）結成当初から引続き現職。委員長を補佐して組合員をリードする忍耐強い斗争心は東北人の故か。フアイト満々そして温厚。

○組織部長・川喜田満枝（特別病棟主任看護婦）俳句、長唄、日本舞踊という日本趣味。だが、こと組合に関しては堂々の態度で組織拡充に奔走している。

○教宣部長・大西喜代子（婦人科医局員）なかなかのフアイト、そのフアイトをもつてすべてをてきぱきと処理している。

○調査部長・分木通裕（内科副部長）組合きつての理論型斗士。常に〝正しい組合であること〟を念題に活躍している。

○副利厚生部長・小辻譲（守衛）役柄上細かい仕事を丹念にやつて地味な足跡を残している。

○財務部長・泉弘子（内科外来勤務看護婦）学院卒後三年目という汝ののつてきた頃。組合財政面をぐつとしめている将来の良妻型。新労本部への会費納入では他の単組に後れじと心を配つている。

○総務部長・安田たまゑ（外科病棟勤務看護婦）直情径行型。新生労組生えぬきで、生ぬるいことなど云つていようものなら医員殿も活を入れられる。

○会計監査・田端まさ（手術場主任）勤務中は年令を忘れさせる若さ。寄宿舎では若い人たちにお茶を教えるという人柄。

なお、代議員として次の諸氏が控えている。○松本行雄（呼吸器科副部長）○奥野庸徳（婦人科医局員）○馬瀬秀子（看護学院教務主任）○多気英子（TB病棟主任）

以上のメンバーを中核にして、みんな苦楽を共にしている。

山田日赤新労
諸兄姉の笑顔

意気高し！

石巻日赤新労

石巻日赤新労では、先般の年末斗争を通じて正常な労働運動の真価が理解されたものとみえて、組織は徐々に拡大されつつある。

このことは、猪突猛進、一旦掲げた要求は何が何んでも押しとおす、という態度だけが組合運動ではない。納得のいくまで審議討論して最善の方向を見出して進む、というと一部の分子は生ぬるい、それは敗北につながる、というかも知れない。しかし、民主的組合運動はそのようにあるべきではないだろうか。赤旗だ！ストだ！と如何にも景気はよいが、その結果労働者を不利な立場に陥しいれたとしたらどうであろうか。組合運動はまつぴらだ、ストをやつて損をした、というような組合不信の感情が芽生えないだろうか。

われわれは正常な組合運動を推進する。それは、いつの日にか真に勤労し、思索する者の理解と協力を得られるものと信じるから。

このごろ読んだものから (2)

――乱読青年――

先月号では推理小説について書いた。しかし、それはそのブームにほんの指さきを触れただけにとどまつた。毎日幾冊か出版される推理小説にいちいち目をとおすとなれば、寝食のヒマもなくなること必定だから、今月はそれらにも触れながら新旧とりまぜて雑然並べてみることとする。

▼地上――五十歳くらいの年輩の人たちなら〝ああ、あれか〟とすぐに納得されるであろう。二十歳の一青年が書いたこの小説の第一巻が世に出たのは大正八年であつた。出版されるや忽ち地上旋風をまき起した。文字どおり洛陽の紙価を高からしめたものである。〝地上を読まざれば人に非ず〟〝天才青年作家の慧星的出現〟というので、印刷が間に合わないほどの売行きで出版元の矢来の新潮社はこれによつて新社屋を建設したと云われた。地上は大正八年の第一巻から十一年に第四巻を出版して四部作を完成している。作者島田清次郎は十一年に渡欧し、翌年春、海軍少将丹木練太郎の次女芳江との恋愛事件が契機となつて失脚した。そして東京巣鴨病院で狂死したのは昭和五年四月である。人を人とも思わぬ彼の在り方は世の悪評の的であつたが、しかし、彼の残した地上という作品は日本の文壇史から逸することはできないであろう。未だにこの作品は若い人たちに読まれているという。なおさきほど直木賞を受賞した杉森久英の「天才と狂人の間」（河出書房新社版・二〇〇円）は、島田清次郎を書いたものである。（新潮社版・地上第一巻地に潜むもの・二五〇円）

▼三百年のベール――推理長篇と銘打たれた南条範夫の作品だ。これは推理ものというよりむしろ考証ものと云つてよいものではなかろうか。徳川三百年の基をきずいた家康という男は、新田源氏の流れをくんだ松平広忠の子などとは真赤な偽りで、実はどこの馬の骨とも知れぬ願人坊主とささら者の娘との間に生れた私生児であるということである。明治三十年頃静岡県庁で学務課長の職にあつた平岡素一郎という男が、徳川幕府が特殊部落というものをでつち上げた原因を追及して、あらゆる資料遺蹟を調査した結果、ついに家康は世良田二郎三郎元信などという人物ではなく、松平広忠の子元康の死後、元康に成りすました願人坊主であることをつきつめ、考証史学の泰斗重野安繹博士の序文をもらつて「史疑」一巻を徳富蘇峰の東京民友社から発行した。以上のような内容である。この作者に〝願人坊主家康〟という作品があるが、それを長編にしたようなものであるが、同じ作者の長編〝わが恋せし淀君〟と似た筆法で、まことに面白い。佳作だと思う。時代物作家として活躍しているこの作者は推理小説にもペンをふるつて〝からみ合い〟（光文社・一八〇円）〝仮面の人〟（光文社・二〇〇円）その他の作品がある。時代物の作品には直木

（二面へ）

（一面より）

賞受賞の〝灯台鬼〟をはじめ〝無明逆流れ〟〝命を売る武士〟〝海賊商人〟〝五代将軍〟〝鎮西八郎〟その他枚挙に遑ないほどのものがあるが、それらについてはまたの機会に触れることもあろう。（文芸春秋社・二三〇円）

▼悲の器――河出書房新社の文芸賞第一回の長篇小説賞に当選した高橋和巳の作品である。作者は昭和六年生れ京大文学部出身で現在立命館大学文学部の専任講師である。著書に長編小説〝捨子物語〟その他がある。悲の器の主人公は、かつて最高検察庁検事で法学博士、いまは某大学法学部教授である。選者の一人守田遂氏が云っているようにインテリを主人公にした作品は多いが、専門の畑での苦労をじかに扱ったものはなかった。この小説はその欠陥をみごとに克服している――。全くそのとおり、実にどっしりとした重厚な作品である。新人としては珍らしく力量のある作家であることが、この一作を読んだだけで頷ずける。原稿紙七百枚にわたるこの長編から若いこの作者の今後の活躍は期待してよい。（河出書房新社・二八〇円）

▼短夜物語――来水明子の時代小説である。この作者は参議院の速記課に勤務しているBGである。昭和七年生れ。昭和三十二年六月、文芸春秋オール読物の第十回オール新人賞小説に、佐藤明子の名で〝寵臣〟が当選した。石田三成を書いたものであった。以来書きおろし長編時代小説を手がけて〝背教者〟〝凍月記〟そして〝短夜物語〟と出版している。〝背教者〟〝凍月記〟は何れも直木賞の候補となったが、どうも一般の読者には馴染みにくい文体である。〝短夜物語〟も前二作と同じくまことに重厚堅実な筆致で書き込まれているが、やはり読みづらいと云われるのではなかろうか。備後三原城主小早川隆景の居城で月待ちの宴が開かれ、その席上で語られたことを細叙しているこの小説は先ごろ新聞の読書欄にもとり上げられ、文献資料の渉猟に定評のある珍しく手堅いこの作者を推奨していた。筆者は、この作者が昭和三十年七月サンデー毎日大衆文芸で佳作になった〝月明り〟から読んでいるが、何を書いても書きこなすであろうという安心感が持てるのである。活躍が期待できる。（短夜物語、東都書房・三六〇円）

▼犯科帳――長崎奉行の記録――という副題がついている。長崎県立教育研究所長の職にある森永種夫の著である。これは幕府の直轄地であった長崎で長崎奉行所の判決録「犯科帳」が寛文六年から慶応三年まで二百年間、百四十五冊、県立図書館に保存されている中から著者がケースの異なる事件を選んで、短かい解説を加えて一冊にしたものである。事件の見出しを手当り次第に抜き出してみても、遊女利用の密貿、唐人屋敷ペトンネル騒り、にせ役人、幼児殺し、アメリカ人とけんか、賃上げ斗争役得利用等々々、まことに多岐にわたっている。それに対してすべて判決が記載されている。興味深い。巻末に安永七年版の長崎の町細図が附してある。（碧波新書・一三〇円）

さて、ここでまた松本清張氏に登場してもらう。読書界にこの人の占める地位は想像以上に強大である。諒とされたい。

▼深層海流――ベストセラーの上位にある。この作は昭和三十六年いっぱい文芸春秋に連載されたものである。先月号で触れた〝日本の黒い霧〟の続編のつもりで書かれたものという。日本の黒い霧――について「事件のすべてをアメリカ軍による謀略だとする筆者の既成観念が先にあって書かれた。つまり筆者が初めから一つの定規を持って、それぞれの事件から自分に都合のいい資料だけを抜き書きしてまとめたというのである。これは全く誤りで、私は殊更に反米的でもなければ共産主義者でもない。事実は事実と見たいだけのことである。たまたま占領という特殊な条件の下に起った未だに明らかにされていない事件を調べてみて、どれにも占領軍という黒い影が射していることに気づいた」と作者は深層海流のあとがきに書いている。

「松川事件、白鳥事件、悉くアメリカ謀略機関の手を感じないわけにはいかない。のみならず昭電事件や占領中の隠匿物資をめぐる〝日銀の十六万一千カラットのダイヤ〟までアメリカ占領軍の存在を否定することが出来ない」とも云い、この作品では〝マーカット資金〟と云われ〝V資金〟と云われるものによって動かされている日本の政財界の奇々怪々な裏面が書かれている。作者は、この作品で〝人間〟を書くつもりではなく、正確と思われる資料と調査によって旧安保時代の日本のかくされた姿が少しでも提供されていたら目的は達すると云っている。（文芸春秋新社・三四〇円）

第二回新労スキー教室

――中京人――

東海道のような国鉄幹線を見慣れている眼には、飯山線の、客車三輌だけの列車がオモチャみたいに映ります。

朝七時十六分、長野からそれに乗込んで、ごとんごとん揺られながら各駅で二、三分から二十分ぐらい停車されると、都会生活のノイローゼなどいやでも消しとんでしまい、久しぶりにのんびりした気分にひたれるから妙です。

列車の進むにつれて雪は一段と深くなり、挙々から田畑まで白一色、通り過ぎる農家の屋根に積った雪がづっしりと重そうです。

飯山を過ぎる頃から車中は一層賑かとなり、あちこちから雪景色の嘆声さえもれてきます。土地の人は、恐らく雪など迷惑至極でしょうが、雪国の苦労を知らぬ吾々にとっては、大自然の中の深い雪がたまらぬ魅力です。

北飯山、信濃平と過ぎて、長野から約一時間半、やっと目的地、戸狩に着きました。

純白の雪に眼をしょぼつかせながら、リュックを背負いスキーを肩に、のどかな感じの戸狩駅前に降り立ちました。

民宿の主人、新労本部の方の出迎えを受けて、名古屋第一、浜松山田目赤その他、参加者が一団となって雪に被われつくした田舎道を歩くのは云い知れぬ気持です。

左手の山にリフトらしいものが見えてきます。その麓に散在する農家が吾々の宿と聞き、歩く足が一層弾みます。

約三十分も歩いたでしょうか、急ごしらえに「村田館」と書いた看板のかかっている農家へ着きました。この他に二軒、合計三軒に分宿と決まり、それぞれ分れて早速コタツに足をつっこみました。

増築したり改造したりの跡がはっきりうかがわれる、文字通りの農家で、親切そうな家族にほっとしました。

少憩の後、待望のスキーです。がやがや、わいわい、始めて着けるスキーに戸迷っている者、慣れた手つきでさっさと着ける者さまざまですが、講師のコトバでゲレンデまで担いで行くことになり勢揃いして出かけました。

ゲレンデに向う準備
宿舎「村田館」の前で

リフトは三百五十米のが一基ですが、変化と起伏に富んだ素晴しいゲレンデで、スキーヤーの少いのも功かります。

最年少組
浜松日赤のメンバー

膝までめりこむ雪の感触に何とも云えぬ快さを味わいながら山の中腹まで登り、そこでクラス分けです。中級者以上を直滑降させて分けるのです。小さなコブにとばされてドシンと尻もち、顔面制動で早速雪グルマ、気楽に滑り降りる者などさまざまです。

クラスはA、B、Cの三つで、Aが初心、Bが中級、Cが上級という風です。

講師陣は千葉氏兄弟、玉井氏の三名で、初心者は歩行練習から始め、適した斜面で各クラスとも講習を開始しました。

先づスキーに慣れること。各クラスとも十六日の第一日は、夜行列車での疲れもあるのでそれを目的として終りました。

第二日、十七日は、準備運動に始まって終了まで規則正しい練習で、BCクラスはこの朝から参加した元スキー国体選手の山崎氏にも素晴しい指導を受け、昼食は全員揃って雪の上でオニギリ。こんな経験は恐らく参加者一同始めてでしょう。

Aクラスは、緩斜面をどうにか直滑降できるようになったらしく終る頃には真剣な顔付でゲレンデの下まで滑って一?一来たのも愉快です。

十八日。この日の正午で、BCクラスを指導していた山崎氏が引揚げ、代って同じ国体選手である畔上氏が指導に入りました。弟さんの千葉氏や玉井氏も一緒に指導を続けています。

Aクラスは直滑降からゆるい斜滑降に進んで得意そうです。

戸狩は豪雪地帯として知られていますが、その名に恥じず降雪量は多く、昨夜の雪でゲレンデは一面に深雪。階段差行で踏み固めるのが毎朝の日課です。

晴れ間はなく、降り続く雪の中での一日が終りました。

十九日。今日は猛烈な吹雪。出発を少し遅らせはしましたがいつも通り練習です。

BCクラスはクリスチヤニアまで進み、Aクラスは曲げの練習に入ります。

思いきってとばすと先が見えないくらいの吹雪に、それでも元気よく練習を続け、畔上講師のクリスチヤニアからウエーデルンに至る模範滑降にはみんな目を見張りました。

夜は懇親会です。

三軒に分宿していた者が一軒に集まり、ささやかな酒と夕食に笑い声が満ち溢れました。

雪山讃歌、山男の歌、山のロザリア、シーハイルと、元気な合唱までとび出して夜の更けるのも知らぬさまでした。

二十日。講習最後の日です。

久しぶりの快晴で、ゲレンデは眼を開けておられぬ程のまぶしさです。

南から東、北へと、高社、志賀高原の山々、笠岳、野沢の峯々が白く落着いた姿を連ね、その麓、戸狩の村々を縫うように流れている千曲川の風情は、詩そのもの、絵そのもののように映ります。

最後の一日を十二分に楽しんで日赤新労スキー教室を了えたのは夕方も間近い頃でした。

宿の人々にお礼を云い、また来るよ、と別れのコトバを残して、日もとっぷり暮れた頃一路戸狩の駅へと向いました。

民宿に、ゲレンデに、楽しかった数日間のあれこれを想い浮べている吾々を乗せて、列車は夜の飯山線を長野へと向っています。

講師の方々新労本部の方々に厚くお礼申上ます。

雪の上にどっかりと
昼食のオニギリをぱくつく

多謝投稿

乱読青年氏。新田とりまぜての書評、毎号ご投稿下さってありがとう。こんごもその意気で。

新労スキー教室を終って、早速便りを寄せて下さった中京人氏、厚くお礼申上ます。

単組からの報告、これも嬉しい限りで本部一同悲鳴しています。

今月号は投稿多く一部ハミ出してしまいました。順次掲載しますので悪しからずご了承下さい。

日赤新労副執行委員長吉原三郎厳父、一郎殿、去る一月十七日、逝去されました。ここに謹みて哀悼の意を表します。

日赤新労本部